梅園さん家のたまきとまどか

サユ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。

この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

梅園さん家のたまきとまどか

【Ｎコード】

Ｎ８６２７Ｚ

【作者名】

サユ

【あらすじ】

梅園さんの家の姉妹は今日も元気です。元気担当物知りお姉さん・環（たまき）と、料理が趣味のおっとりとした妹・円（まどか）、二人は美人姉妹と近所で評判です。昔から円はお姉ちゃんが大好きです。環も妹が大好きです。でも、二人の気持ちはちょっとだけ違うようです。姉妹は私立菖蒲ヶ丘女子高等学校に入学します。そこで出会った友人と一緒に過ごす日常は毎日が遠足以上。毎日がどきどき、わくわく、ふわふわでいっぱい。みんなと一緒に、ゆるやかな坂を一踏みずつ歩いて行くように、今日も姉妹は成長中です。　※四コマ風。　４２文

字×３６行の見開き（よくオーバーしますが二枚分におさめてます）ごとにお話が進んでゆきます。　ふわふわしながら連載開始です。楽しいお話をめざしてがんばります！！

評価・感想・ご意見ご要望ありましたら、いただけるのであれば、この上ない喜びです。

はじめに（前書き）

はじめに。を追加しました。設定など紹介いたします。

はじめに

はじめに

この物語はフィクションです。登場するすべてが作者の妄想でできています。

内容は、「遅れてきた百合日常ショートストーリー集」です。日本の北の方にある私立菖蒲ヶ丘女子高等学校（あやめ高）に進学した梅園環（うめぞのたまき）、梅園円（うめぞのまどか）姉妹と、その友人達がゆるゆる日常を送るお話です。ちょっとだけ百合です。でも、このお話のメインは妹円の重箱お弁当の中身です。作者は心から楽しんで書いていますので、よろしければおつきあいください。

登場人物

梅園円（うめぞのまどか）

双子のうち、妹担当。誕生日は6月12日。本編語り部。のほほん担当。しっかり者（？）の姉の元で育ったせいか、ちょっと常識からずれた考察力の持ち主。的は外すためにある女の子。料理が得意でお弁当を含めた三食すべてを担当している。そしてなによりお姉ちゃんが大好き。とにかくお姉ちゃんが大好き。お姉ちゃんがいれば幸せです。ほくろの位置は口もと右下。

梅園環（うめぞのたまき）

双子のうち、姉担当。誕生日は6月11日。物語の牽引役。愛称はたまき。しっかり者だけれどおおざっぱでいい加減なところもある。けれど、快活に笑い時に一緒に悩むことのできるよき姉。妹を何よりもいちばんに大切にしている。妹が困ると必殺技「お姉ちゃんパ

ワー」を発動する。ピッキングとかしちゃう。普段は家事から何まで妹任せ。勉強はできる。もちろん姉妹そろって容姿はまるで一緒。見分け方としてほくろの位置が妹と逆。口もと左下。

鶴来冴子（つるきさえこ）
梅園姉妹のクラスメイト。誕生日は3月3日。ツッコミ担当。愛称はさえこ、さえぴょん。スレンダー美人。堂々たるメリハリのある高身長ボディと、ふわゆるの長髪に切れ長の目はまさに大和撫子。冷静な立ち回りで的確にスマートにツッコミを入れる。が、ツッコミを入れられる間柄になるまでは「アタシの右腕鎮まれ」など危ない発言をすることがある。手がエメラルド色に発光こともあるらしい。けれど、もともと背も低く内気な少女だったらしい……。それを知っているのは今となっては幼馴染みだけである。入学式で円と友達になる。彼女のポテンシャルはまだまだこれから引き出されるでしょう。

道音新菜（みちおとにいな）
梅園姉妹のクラスメイト。誕生日は4月9日。掻き乱し担当。愛称はニーナ、ブラジルさん、極小などなど。金髪ツインテールのちびっ子。どうやらスウェーデン人の血が四分の一入っているようです。身体測定の公式記録によると１４２ｃｍらしいが本人は１５０ｃｍと公言している『保健室の先生談』。冴子と幼馴染みで、冴子が心配で同じ高校に進学するほど冴子ラブ。けれどいつも想いは空回り気味。「～なのですわ」など、お嬢様っぽい口調だが、その通り、父親は国際線のある航空会社の社長。いつも冴子に邪険にされるが、冴子の罵倒を受け流す機能が脳のどこかにあるらしく、まったくへこたれない。憎めないやつ。

九条尋緒（くじょうひろお）
ｎｏ　ｄａｔｅ．．．三話くらいで登場する新キャラを用意してま

す。姉妹のライバルになるかも…！

舞台

あやめの市
日本の北国のどこかにあるらしい。梅園姉妹の住んでいる街。

私立菖蒲ヶ丘女子高等学校
あやめの市にある進学高。施設の充実度は全国トップクラスを誇る。『未来を創る女性』『文武両道』を学校の精神として掲げ、学業の他に部活動にも力を入れている。新校舎（本堂）に加え、第一第二体育館、格技場、室内プール、野球場、トラック付きサッカーグラウンド、体育用グラウンド、トレーニングルーム、旧校舎（部室棟）、寮などがある。生徒数は１５００名ほど。３００名ほどが寮生活を送っている。校則はとても厳しいことで有名。梅園姉妹達は旧校舎の今は使っていない家庭科室で放課後によく駄弁っている。

梅園さん家のたまきとまどか

私の名前は梅園まどか。
お姉ちゃんの妹をやっています。
私の朝は早い。
お姉ちゃんよりも、ずっと早くに起床する。
パジャマ姿から制服に着替え、エプロンをひっかけて、私はキッチンに立った。
「今日は雲一つない快晴だ」
小窓から澄んだ空が覗いている。
「ん～、二度寝したら気持ちいいだろうなぁ」
そんなことを呟いてはみたものの、ダメダメ、やることといっぱいなのです。
私はお姉ちゃんのためにお弁当を作らなければいけないのです。
ついでに、あくまでついでなんだけど、自分のもね。
日付は四月一日。
今日は高校の入学式。
私が得意とするお弁当作りで張り切らないわけがない。
こんな気持ちのいい日は公園でお弁当を広げると、美味しいんだよなあ。
「……入学式も大きな公園でやればいいのに」
そしたら、青空の下で私の作ったお弁当を頬張るお姉ちゃんを眺められるのに。
んー……、お姉ちゃんはもう高校生なのだし、ちょっとできそうにないか。
そういえば、高校って遠足あるの？
「……あ、みつけた」
私は食器棚の奥に重箱をみつけた。
それをひっぱりだして、にやけてみる。

お姉ちゃんの好物は、アスパラベーコン炒め。
ベーコンはちょっとだけ焦がしたものがいいんだって。
噛みしめるとじゅわっと味がしみ出るらしいよ。
私は、だから、火力強めで一気に炒めることにした。お姉ちゃんの好みの通りに。
私はお姉ちゃんの事でわからないことはないよ。お姉ちゃんの方が物知りなんだけどね。
「ん～、いい匂い。お姉ちゃん、喜んでくれるかなぁ」
よし、高校生活を始めるにふさわしいお弁当を作るぞー。
でも、高校ってどういうところなんだろう。
バナナはおやつに含まれちゃう校則とか、あるのかな。
お姉ちゃんは知っているかなぁ。
あとで聞いてみよう。
チクタクチクタク。時計の音がちょっぴり大きい。
午前六時のキッチンはちょっぴり寂しい。
お姉ちゃん、早く起きてこないかな。

梅園さん家のたまきとまどか2

お姉ちゃんの名前は梅園たまき。
私と合わせて円環になります。んんと、円環姉妹とか、小学生の頃は言われてたなぁ。
私とお姉ちゃんはまあるい輪で繋がっている。だから、私はこの名前、好き。
お姉ちゃんも、同じ気持ちだといいな。
午前七時。
私は二階に上がって、お姉ちゃんの部屋の扉をノックした。そろそろ起こさないと、遅刻してしまう。部屋を覗くと、お姉ちゃんはまだ寝ているみたいで。
「おねーちゃーん」
私はそっとベッドに声をかける。
「……」でも、返事はなかった。
私はエプロンで手を拭いて、がばっと布団をはいでみる。
……あれ？　あれあれ？　巨大てるてる坊主が現れたよ。大きさは私と同じくらい。
「……コレは何？」
世の中、不思議なことばっかりだよね。お姉ちゃんならわかるかな。
「まどか、それは今日この記念すべき入学式という日を快晴にするための、かりんとうの袋に入っていた乾燥剤をふんだんに詰めた、たまき特性てるてる抱き枕だ！　どうだこの快晴っぷり！　うりゃあ！　おはようまどか！　うりゃりゃりゃりゃっ！」
「ぎゃーーーーー！　ぎゃーーー！　ぎゃーーーーー！」
背後からお姉ちゃんがエンカウントしてきたよ！　どこから現れたの！？
朝からもみくちゃにされてるよ……！　ああ、でも、お姉ちゃん

は私の好きなところを知っているから、なんだか手足が痺れてきた。
「おねぇちゃ……ん……」体に力が入らないや。
頭を撫でられるのは、気持ちが良いよね。
「これが忍法変わり身の術だ。まだまだ隙だらけだな。はっはっは」
「忍法使われたら、勝てないよぉ」
振り返ると、姿見で映し出されたような私の分身が高校の制服を着ている。
くりくりした大きな瞳に、さらさらの髪の毛。やっぱりいつでもお姉ちゃんはかわいいなぁ。
そうそう、姉妹と言っても、私たちは双子なんだよね。違うのはほくろの位置だけだよ。
私は唇の右下に。お姉ちゃんは唇の左下に。だから鏡合わせ。鏡映文字のようだってお姉ちゃんは言っていたよ。
「あれ、まどか、なんで中学の制服着てるんだ？」
「おろ？」どういうことでしょう？
「さては寝ぼけてるな。昨日『同じ高校に行けるんだよね！？　本当にお姉ちゃんと一緒に！？』とか興奮しすぎて寝れなかったか？」
あ、そっか。私も今日が高校の入学式だったんだ。でも、寝ぼけてないよ！
ん～、でもどうして間違ったんだろう？
頭をくしゃくしゃされて、少しだけ恥ずかしい気持ちになった。
「お姉ちゃん、高校ってどんなところかな？　遠足にバナナ持って行ってもいいのかな？」
「まどか、高校はな、遠足よりも楽しいことがいっぱい待っているぞ！　バナナだけでなく、かりんとうだって持って行ってもいいんだ！　だから毎日が遠足だ。いや、毎日が遠足以上だ！　覚悟しとけっ」
ビシィっとお姉ちゃんは決めポーズ。
なんだか、私、ワクワクしてきた。そっかぁ、私も高校生になったんだよね！

入学式とお弁当と空き教室

校舎前の掲示板で私は驚いていた。
まさか、こんなことが起こるなんて、夢にも思っていなかったから。お姉ちゃんは言った。
そのまさかだよ。
「……しかし、話題作りの一環なんだろうな。家が同じなら情報の発信源を一つにまとめることができるし何より色々と教師側の手間が省ける。二人で一つ扱いか……、図られたな」
そう、私とお姉ちゃんは同じクラスになれるようです。
ほら、ちゃんと見て。指さして。はいチーズ。――パシャ。
というわけで、私は浮かれています。写メ撮っちゃった。
お弁当を抱えながらだったから苦労したよ。でも、お姉ちゃんの大事なお弁当だから一緒に写りました。あ、まだ中身は秘密なんだ。
なので、お姉ちゃんがどうして怪訝な顔をしているのか、わからない。
「もしかして、イヤ？」
「そんなわけないじゃないか。ウチは姉として、まどかから目を離さなくて済むから一安心だ」
ううんと、つまりそれは、『お姉ちゃんはまどかから一瞬たりとも目を離したくない目を離したら死ぬ。いやむしろ死ぬ』って事だよね。嬉しいけど、まだ朝だし、玄関先だよ？　気が早いなぁお姉ちゃんは。
校舎に入ると、初めて嗅ぐ匂いがした。これが――高校。
ていうか、女子校！　右も左も女の子だらけ！　桃源郷っていうか、百合源郷？
すんばらしい。
だめだめ、私にはお姉ちゃんがいるのです。浮気、ダメ、絶対。
「にしても校舎に入る前にこの学校の体質に一石投じたくなったぜ」

「なんで？」
新品の靴をきゅっきゅ言わせながら、一年生の階を目指す。……
といっても半歩先を行くお姉ちゃんの後について行ってるだけ。さっき、何年何組か見忘れちゃった。あ、一年なのは間違いないよね。
「めんどくさがりが多そうだからだ。双子を一括りにするとか、怠惰だろ」
「そうかなぁ。私は嬉しいよ」
むつかしい言葉を使われたので、率直に感想だけ。
お姉ちゃんは、やっぱり物知りだ。
「ウチも嬉しいぞ。だがな、きっと面倒なことになる。そもそも、それも予定調和か」
ガラガラと教室の扉をお姉ちゃんは開ける。
あ、そういえばここ何組なんだろ？　つまり私は何組？
私は上を向きプレートを確認する。四組だそうです。
と、教室がどよめいた。私は上を見たままよろめいた。お姉ちゃんにぐいっと引き戻される。
「……双子だ！」明るい声。教室には半分くらい生徒が集まっていた。みんなの視線がこっちに集中している。そっか、珍しいんだっけ。
「〜〜〜あぁ、めんどくせえ。コレだよコレ」お姉ちゃんが私を置いて先に教室に這入る。
「待って待って！」
私も慌ててその後ろに付いていく。
なんかお姉ちゃん、機嫌悪いなぁ。なんとなくわかるんだよね。
確かに私も、お姉ちゃんの事を興味津々に見るクラスメイトが、お姉ちゃんに恋をしてしまわないか、本気で心配です。
お姉ちゃんのかわいさは、珍しいからね！
どうしよう、お姉ちゃんを巡るライバルが、いきなり増えちゃったかもしれません。
ライバル……多すぎるよ……。

入学式とお弁当と空き教室2

校歌斉唱は歌えませんでした。
作詞者の名字が特に難しかったよ。龍ヶ嶺そ、そー……、なんて読むの？
そんな風にプリントとにらめっこしてたら、みんな座っててびっくりしたよ。
いつ終わったの？　お姉ちゃんも教えてくれればいいのに。って、今は私の前に座っているんだった。……首だけくるりとこっち向かないかな。
ところで、他のクラスの子かな？　歌ってたんだけど、いつ練習したの？
不思議だなぁ。
にしても入学式は眠たいなぁ。
校長先生の話が長いよ。眠いよ。睡眠導入剤ってやつだよ。ほら、不眠症になったアイドルがよく飲むやつ。え？　そんなのない？
お姉ちゃんに聞きたいけど、聞けないしなぁ。
それより。
びっくりしたことがあったよ。
誰かに聞いて欲しいよ。
でもお姉ちゃんに話しかけたら、先生方に印象悪いよね。
お姉ちゃんの印象が悪くなっちゃうことはしてはいけない。我慢……でもっ、
「あ、あの。どうして校長先生、男、なんでしょうか、ね？」
訊いちゃった！　隣の子に訊いちゃった。
悪いことしている私、現在かっこいいかもしれません。
ドキドキして、隣を向くことができないから、ちゃんと聞こえているかな？
不安だけど、どうしよう、横向けないよ。

「ぶっ」
あれ？　なんか吹き出されちゃった。
と思ったら、くすくすと周りが笑い始めちゃったよ。
あれ？　お姉ちゃんまで肩が震えてる……！
「ねぇ、本気で言ってんのアンタ。何ソレ、もう笑わせないでよ」
隣の子に小声で返されて、ついでに脇腹を突かれた。その子はまた「くくっ」と笑い始めた。
私はぎりぎりとロボットみたいに首を曲げて「どうして？」と小声で返す。
「うちの担任も男でしょうが。女子校でも男の先生くらいいるわよ」
そういえば、初老のおじいちゃん先生でした。
「ハートキャッチ、ばっちりね」
ウインクされちゃった。映画以外で初めて見たよ。
その子は大人っぽい人でした。切れ長の目で、なんだか諭されているみたい。
ほわわっとウェーブのかかった髪の毛は、毎朝コテでセットしてるのかな？
「そ、そうなんだ。物知りだね」
お姉ちゃんとどっちが物知りかな？
「アンタ、それ狙ってるの？　……いえ、ごめんなさい。そういう感じはなさそうね」
「どういう感じ？」
「どうもこうもないわよ。……アタシの名前は鶴来冴子（つるぎさえこ）。よろしくね」
鶴来さんは、目であなたの名前は？　と訊いてくる。でもどうしてわかったんだろう？
「あ、ええっと、前に座っているのがお姉ちゃんのたまきです」
「じゃなくてあなたの名前」
「はうん」まだ紹介途中なのに。いつもそうなんだけど、私はお姉ちゃんを紹介してからじゃないと、　自分の事を話せないんだよ。

私は息継ぎをして。
「まどかです」
「双子なのね。でも同じクラスになるなんて、そんなこともあるのね」
お姉ちゃんと同じ事を言うんだ。そんなに珍しいのかな？
「……無礼かもしれないけど、あなたたち見分け方とかあるの？」
「あ、よく聞かれますから、大丈夫ですよ。私たちは簡単です。美人な方がお姉ちゃん」
相違ない。お姉ちゃんは誰よりも美人でかっこいいんだから。
「……あの、アタシには……、ごめんなさい、似すぎててわからないわ」
「双子素人だからですよ、きっと」
お姉ちゃんの魅力に気がつかないなんて。お姉ちゃんを早く紹介したいなぁ。
「あなた、まどかちゃんだっけ。面白いのね、とても」
ん？　そんな面白いこと言ったかな？　そういえばさっきも笑われちゃったっけ。
今も笑いをこらえているような……。私、へんかな？
「なんだか、いい友達になれそうな気がするわ。今年一年間、よろしくね」
「う、うん」
胸がほわっとなった。「うん」って言ったけど、胸の中では「うっそー」くらい思ってる。
綺麗な笑顔……、でも、ダメダメ！　これは違うよお姉ちゃん。
どうしよう、お姉ちゃん。いきなり友達できちゃったよ。
名前は、鶴来冴子さん。
ああ、早くお姉ちゃんに伝えたい！
これが高校……すごいところだね！
でも、安心してお姉ちゃん。浮気はしないから。
だから、あとで一緒にお弁当食べようね。

しばらく私は目をつむることにしました。ね、寝てないよ！

入学式とお弁当と空き教室3

「というわけで、お友達……できちゃったみたいなの」
お昼休み。教室に戻ってきたよ。やっとお姉ちゃんに、報告だよ。
何事も、組織ではホウレンソウが大切とお姉ちゃんは言ってたし。
姉妹は……んー……組織っていうのかな。
「その言い方、なんか使うシチュ間違ってないか？」
お姉ちゃんが椅子の背もたれに肘をのせて、威厳たっぷりに座っている。
「えー。そうかなぁ」
「『できちゃったみたいなの』……って、新妻か！　妻夫木か！」
どうして突っ込まれたのだろう？　でも、『できちゃったみたいなの』と私の真似をするお姉ちゃんかわいいなぁ。
腰のラインが、いいんだよね。わかるかな。
「ところで、お姉ちゃん。そのお腹をさする手は何？」
「三ヶ月ってところかな」
鈍い私でもわかっちゃったよ、そのジェスチャー。……私との子？
「でも、できちゃったんだよ？　お姉ちゃん」友達がね、いきなりだよ？
「まぁ、お姉ちゃんという存在は妹よりも先にできるのかもしれないが」
まだ言うの！？
「最近の動向だと、『できちゃって』から、婚姻届を取りに行く男女が多いらしいわよ」
鶴来さん、大人っぽい発言で広げないで！？
恥ずかしいよー。
私の机の横に椅子を持ってきて座っていた鶴来さんが小さなあごに指を当てる。
鶴来さん、お姉ちゃんとも仲良くなってくれそうだよ。

大人っぽくて、美人で、お姉ちゃんとはちょっと違うけど、しっかりものさんのイメージかな。背は　私たちよりも、少し高くて、スラッとしてるんだ。ウェーブのかかった腰くらいまである髪の毛に、きりりとした切れ長の瞳。怖い人なのかなとも思ったけど、そうじゃなかったみたい。

「『できちゃったの』という台詞のありがたみが半減っつーか全壊だよな、そうなっちまったら」

「クリスマス前にプレゼントの隠し場所を当ててしまった時の残念感よりもひどいものね」

「だよなー。地上で爆発しちゃった三尺玉くらいかもしれないぞ」

「ふふふっ」「はははっ」

え、二人だけで笑わないでよぉ。どこで笑えばよかったの？

なんだかこの二人、仲良くなりそうです。

どうしよう、このまま鶴来さんがお姉ちゃんのことを好きになっちゃったら。

「まどかもそう思うか？」

「え、ええと……、うん、そう思うよ」

なんとか私も話題についていかなきゃ。大人の階段だってのぼってみせます。

にしても、どうしよう。んー。

あ！　そうだ。

「お、お昼だしさ、お弁当食べよう？　私、今朝作ってきたんですよ。鶴来さんも食べます？　たくさんあるから、三人で食べてもじゅうぶんだと思うんですけど」

私はそう言いながら、重箱（四段重ね）を「うんしょ」と机の上に置く。

ズシィっとくる重さは、本物だね。

この重さは私の愛だよ。愛なのだよ。愛の結晶なのだよ。大人にはわからない愛！　なんちゃって。このお弁当はね、登校日初日、入学式、様々なイベントに華を添える、

まどかスペシャル☆まんぷく弁当　四段腹！

です。

お弁当箱のイラスト、お相撲さんなんだよね。えへへ。アマゾンで買ったよ。

むつかしい話はやっぱりお姉ちゃんの専売特許だから、あまり会話に入れないかもしれないけど、鶴来さんとも仲良くなりたいけどでもライバルだけどでも今日はお腹も空いたし……、青空の下とはいかないけど、友達とかね、みんなで食べたら美味しいんだから。

ガラガラ――。

扉が開く音で、教室がトーンダウン。

「ふぁい、じゃあ帰りのＨＲ始めますよ～」

え？　え？　あれ？　あれあれ？　ほぉ、私、落ち着いてみます。

「えぇぇーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーー！？」

入学式とお弁当と空き教室４

引きずられるようにして、下駄箱のところまで来ちゃったよ。
「そんなに落ち込むなよ。まどか」
「だって……。だってさ……」
さすがに凹むよ……。
「お姉ちゃん、まさか入学式だけで今日は終わりだと思わなかったんだよぉ」
ちょっとだけ、腕を振って抵抗してみる。
「案内には書いてあったわね」
え、そうなの？　穴が空くくらい読み返したのに……。
「たまきちゃんは知らなかったの？」
「いんや、知ってた」
え、知ってたの？　って当たり前だよね、お姉ちゃん、何でも知っているし。
「……どうして教えてあげなかったの」
「まどかも知っていると思ってたんだよ～」
「お弁当一緒に作ってたんでしょう？」
「いやー、ウチは寝てたからなぁ。家を出る時、入学式だけの割には荷物多いなぁとは思ったけどね。まどかはいつも荷物多いかんなぁ。はは」
うう。みんなで食べたいなぁ。お姉ちゃんもどことなく寂しそうに笑ってるし。
「たまき……ちゃんは、ちょっとだけ、アタシの知り合いにちょっと似ている……ちょっと」
「ん……冴子、なんか言ったか？」
「ううん、何でもないわ。意識すると、アイツは現れるのだから。……鎮まれアタシの右腕」
鶴来さんがなんか怖いです。手からエメラルド色光が……、錯覚？

でも、お弁当、学校で食べたいなぁ。
「お姉ちゃん。鶴来さん。学校にこっそり残って、食べていくこと、できないかなぁ」
上履きのまま、玄関先で体育座りをする私。
「わがままな妹を持つと苦労するなぁ」
ごめんね、お姉ちゃん。
「せっかくだからアタシも是非というところなのだけど、んー、たしか閉門時間があったわよね？」
鶴来さんは鞄を肩にかけ直しながら、門の方を確認する。
もうあまり生徒もいないし、やっぱりみんな帰ったのかな？
「いんや、あるにはあるが、実は今日から上級生は部活がある」
「あら、じゃあ残っても平気なのね」
「そういうこと。でもこっちの本堂は鍵がかかるから、部室棟にいかないと締め出しをくらうだろうな」
私立菖蒲ヶ丘女子高等学校はね、本堂と部室棟と複合体育館と陸上トラック付きグラウンドと野球場と……ええと、あとなにがあるんだっけ？　とにかくとても広いんだよ。
「それで生徒数が少ないのね。部室棟って、旧校舎よね」
「そうそう。まぁ、結構校則キビシイからなあ、ウチは。……問題はどこで食べるか」
後頭部をぽりぽりかいて、なにやら考えるお姉ちゃん。
そして、少しだけ沈黙した後、お姉ちゃんは腰に手を当て、胸を張った。
お姉ちゃんは自信満々に叫ぶ。
「お姉ちゃんパワー！！」

入学式とお弁当と空き教室5

「……よくこんなところ目をつけたわね。上級生でもここの扉が開いてたこと、知らないんじゃないのかしら？」
「開いてたんじゃない。開けたんだ」
「え」
「このお姉ちゃんパワーツールの一つ、針金くん一号でな」
と、お姉ちゃんは手の中の針金をもてあそぶ。
「ピッキングじゃないのよ。ていうか、いつ鍵穴を開けたのかわからなかったわ……」
鶴来さんがふわふわの髪の毛を揺らしながら、驚いている。
私だって驚いてるよ、お姉ちゃん。
本当にお姉ちゃんはすごいなぁ。
ほんと、どうやったの？　不思議だなぁ。
「ここならお弁当広げても何も問題ないだろ。むしろお弁当を広げるべき場所だ」
鼻を鳴らすお姉ちゃん、かっこいいよ！　世界一だね！
「なぜならここは旧校舎の家庭科室。家庭科室は料理をするところ。料理をするところは食べるところ。食べるところはウチらの国土さ。相場はそう決まっている！！」
「……乱暴な三段論法ね。でもまぁ……」
最後に這入ってきた鶴来さんは家庭科室の扉を閉めた。
ちょっとほこりっぽいかな、ここ。
「お姉ちゃん、でも、バレたら怒られないかな？」
と、私はついつい不安を口にしてしまった。
「確かに、まどかちゃんの言うとおり、使用禁止の可能性もあるわね。まだ火器類は使用できるみたいだし」
しゅぼっと鶴来さんはコンロの火をつけた。
鶴来さん、危ないよ？　意外と手が早いのかな。

「誰かここで遊んでいないか見回りがくることもあるんじゃないのかしら？　あら、水も出るのね」
「ああ、鶴来さん、そんなにいじったらダメですよぉ」
「ちっちっち。……まどかに冴子よ。誰も使っていないからこそ、安全なんだよ」
　あらあらついつい、という鶴来さんを遮るように、お姉ちゃんは指でメトロノーム。すると、鶴来さんは、
「というのは？」
「これを見たまえ」
　ニヤリと笑い、メトロノームをしていた指先で、大判の机の表面をぬぐう。
「ふむ。予想通り。ずいぶん清掃に這入っていないようだな。四ヶ月分の埃だ」
「なんでそんなことがわかるのかしら？」
「ウチが掃除しない人間だからさ。簡単な推理だよ。経験則に基づく推理だよ。灰色の脳細胞を使うこともない」
「自慢するように言ったわね」
「むむっ」
「お姉ちゃんの指先、灰色だね！」
　あいた！
　ズビシッと指でチョップされちゃったよ。
　うう。今鶴来さんに向けられたチョップが私に軌道修正された気がするんだけど、違うのかな。
「年末の大掃除が最後か……。それにこの学校に調理器具を使うような部活はない。昨年度の冬休み明けも、春休みも、だれもここを訪れちゃいないのさ。これを安全と言わずになんと言おう！！」
「あ、あんぜん……？」
　頭の埃を落としながら私は聞き返す。
「……とは言えないような気もするのだけれど」
「まぁまぁ、そんなこと言ってないで、とりあえずお弁当広げるた

めに少しだけ掃除しようぜ。ほら、まどかは清潔なぞうきん探してくる！　冴子はちりとりとほうきな！」
「わかったよ！　お姉ちゃん！　お腹空いたもんね！」
善は急げ、だっけ。はやくここで食べちゃえば、大丈夫だよね。
「たまき……ちゃんは？」
怪訝な顔をする鶴来さん。
「お腹を空かせて待つとする。立派だろ？」
うん！　お姉ちゃんらしくて、かわいいよ！　私お姉ちゃんのためにお掃除がんばるね。
「……むぎぎ……」
「あれ？　鶴来さん？　大丈夫ですか？」
「……鎮まれ……鎮まれ……シズマレ……」
髪の毛がふわふわっと逆立って、また右手が……！　ひーん、鶴来さんが！
「大丈夫、ごめんなさい、なんだか昔を思い出してしまって」
しゅぼん、と鶴来さんから変なオーラが消える。
「ほう、いい思い出か？」
「なわけないじゃないのよ！」
掃除、さっさと済ませるわよ！　と鶴来さんがなにやらやる気を出したみたい。
これならすぐにお弁当を広げられそうだよ。
ありがとう、お姉ちゃん。鶴来さん。
私のわがままに付き合ってくれて。

入学式とお弁当と空き教室６

「これ、おいしいわ……」
「だろー？　自慢の妹だからなあ」
へへへ。
お姉ちゃんも、鶴来さんも、二人とも私のお弁当食べて笑顔になってる。
家庭科室の片付けはすぐに終わった。
私はお掃除も好きだから、あっという間に終わらせて、ランチタイムです。
今日のお弁当は、まず一番下は、おにぎりだよ。中身は、鮭、梅、シーチキンマヨ。
二段目はサンドウィッチ。タマゴ、ハム。
三段目はお野菜中心の和食総菜詰め合わせ。
四段目はね、えへへ。
「けれどどうして最上段にアスパラベーコン炒めがぎっしり詰まっているのかしら？」
「えへへ。お姉ちゃんの大好物だからですよ」
一番上にお姉ちゃんの好物でいっぱいにするのは、私の特技なんです！
「でも多すぎるんじゃ……」
「おかわり」
あ、お姉ちゃんだ。
「はい♪」
「オカワリッ！」
「はいっ♪」
「ＯＫＡＷＡＲＩ☆（めっちゃ良い声で）」
「もうひとこえっ♪」
「……何そのわんこスタイル……ってアタシまだ食べてないわ！」

あらら、もうアスパラベーコン炒めがなくなってしまいました。お姉ちゃん美味しそうに食べてくれて、嬉しいなぁ。私それだけでお腹いっぱいだよ。
「お、冴子も食べたかったのか。まぁしかしまどかの料理を振る舞ってもらえただけありがたいと思うんだな」
「いえ、まあ、そうなんだけど……感謝もしているのだけれど。でもなんでたまきちゃんがこんなに偉そうなのかしら……こほん。まどかちゃん、ありがとう、同じクラスになれてよかったわ」
かわいい笑顔だなぁ。
笑わないと、きりりとしたちょっと強面になるのに、笑うとこんなにふわふわするんだ。
私は鶴来さんの紙皿にサンドウィッチを取り分けて。
「私も入学式の時、鶴来さんが隣でよかったです。……でもなんであんなに笑われたのかな？」
「まどか、冴子と友達になれてよかったじゃないか。あれは良いボケだった」
そっかよかったんだね、お姉ちゃん。それで鶴来さんと友達になれたんだよね。
「まどかちゃん」
「なんですか？　鶴来さん？」
「そう、それよ」
ビシィっとひとさし指を反らしてクールにウインク。
「へ？」
鶴来さんの表情がきりりとなった。
「友達になったんだから、敬語はちょっと違和感があるわ。同級生なのだし」
「変ですか？」
「変よ。だからこれからは冴子って呼んでほしいし、敬語もダメ」
「そうだな。ウチはもう冴子のことを冴子と呼んでるからな」
おにぎりを両手に持ってお姉ちゃんはもぎもぐしながら言う。か

わいいよ！
「……たまきちゃんには敬語を使って欲しくなるのはなぜかしら」
ちまちまとリスみたいにサンドウィッチを食べるつる……冴子ちゃんかわいいや。
目移りしちゃうよ。
「でもでも、そうだね、つる……冴子ちゃん、がんばるよ！　ぶい！」
冴子ちゃんはとても素敵な人。
友達になれてよかったな。
「ね？　お姉ちゃん。あ、ご飯粒ついているよ」
「お……お、おう」
私はひょいっとご飯粒をお姉ちゃんの口元から拾い上げる。
お……おろ？
「どうした？　まどか」
おおおおおお、お姉ちゃんの口元に付いていた……ああああああ。
たたたた食べていいかな？　いいよね？
こ、これはあれだよ、食べ物粗末にしたらいけませんっていうアレだよ。
べべべべ別におおおおおおおお姉ちゃんの口元ににににに……！
「なんか汗かいているじゃないか。熱でもあるんじゃないのか？」

――ピト。

お、おお、おでことおでこでガールミーツガール……！！

ノンノン！　これが噂のシスターミーツシスター！！

「ついでにウチのおにぎり返して貰うぞ」

「指す、すす、す」

吸われたぁぁああ！

私は顔から火が出そうになって、がばっと体を反らす。

「あら、市販の風邪薬なら持ち歩いているけれど、使う？」

さ、冴子ちゃん……や、やさしいいいい！

「ななななんでもないです大丈夫ですぅ！　マイラブイズフォーエバー」

「……本当に大丈夫なの？　まどかちゃん時々様子が変よ？　朝から風邪気味だったんじゃ？」

わわわ私がお姉ちゃんのこと好きなのばれちゃう！

冴子ちゃんって勘が鋭いの？

「ああ、まどかのやつ、いつもこんな感じだぞ？」

「そそそそうだよ、冴子ちゃん、まどかのやつ、こっ、これが正常だぞ！」

「……そ、そうなの」

なんとかごまかせたよ。ふぅ。

「しかしこうやって並んでいるところを見ていると本当にそっくりね。性格はまるで違うから表情が違って見分け付くけど、黙っていられたらわからないわ」

「まぁ双子だからなー」

お姉ちゃんが私から離れて、再びおにぎりに手を伸ばす。ちょっと残念。もう少しだけ……。

「美人な方がお姉ちゃんだよ？」

「外見は同じに見えるわよ」

「そうかなぁ」

すると、お姉ちゃんがもぐもぐしながら。

「まぁ、一つだけ違うのはほくろの位置だな」

うん。そうそう、私は唇の右下。お姉ちゃんは唇の左下にほくろがあるんだよね。

「あら、よくよく見れば」
「ちなみにウチの誕生日は６月１１日午後１１時５０分。チェジウと一緒だ」
「あ、私は６月１２日午前０時１０分。松井秀喜と一緒だよ！」
「え、ああ、うん。そうなのね」
あれ、鉄板のネタが……。

と、そのとき、家庭科室の扉がガラガラと開いたのだった。

入学式とお弁当と空き教室7

「食べ物の匂いがしますわ！！」
家庭科室に転がるように這入ってきたのは、着物を着た小さな金髪ツインテールの女の子でした。というか、あれ……なにゆえ前転？　しかも伸身……。これではあの大物女優のようです。
ころん、シュタッ！　と。
私の目に金色の房がふたつ飛び込んできて。
この子小さい！　かわいい～☆
「おお、活きのいい伸身前方回転だな」
お姉ちゃん冷静だよ！　私も人のこと言えないかもですが……。
「そんな感心してないで……っ！　あ、あの、これは……すぐに片付けますから！！」
どうしましょう、茶道部？　日本舞踊部？　の先輩かな？　なでしこさんかな？
こんなところで内緒でご飯食べてたなんて、入学早々怒られちゃう！
なのに、なんで冴子ちゃんはしれっとしてるの？　お姉ちゃん笑っているの！？
悪いことはやっぱりしちゃダメだったんだよ！
「やはり！　食べ物に混じったさえぴょんの残り香！　見つけたのですわ！　鶴来冴子！」
外国人みたいな子なのに、背景に富士山が見えるよ……！　てか、今……。
「え、え、え？　どういうこと！？」
冴子ちゃんと知り合い？
同級生？
「あー、面倒なやつが……」
冴子ちゃんの周りがどんよりしている。今まであったきりり感が

まるでないよ！
「部活の見学会を抜け出して正解でしたわ！」
「わっはっはっはっは、なんかよくわかんねえけどおもしれえー」
「お、お姉ちゃん！」
なんかすごいことになってきちゃったよ。
「さえぴょん！　どうしてわたくしと同じクラスになれたというのに一言も声をかけてくださらないの！？　わたくしとあなたは旧知の仲！　前世で交わした契りの元に今ここにこうして懇ろな関係になれる舞台は整ったというのに！　……はっ！　ふふん、さてはわたくしの胸に飛び込んでくるのが恥ずかしいのですわね！　でももう大丈夫ですわ！　この道音新菜（みちおとにいな）が全身で受け止めてあげますわ！　さあ！」
振り袖をがばっと広げて、小さな女の子……道音ニーナさん？　ハーフかな？　フランス人形みたいな子が上品にポーズを決める。
もう手乗りサイズくらい小さくてかわゆいよぉぉぉ！　……はっ！？
「えっと、し、知り合い？」
旧知の仲ということは、幼馴染みかな？
「ま、まぁそんな感じかしら。本当は知らないと言いたいくらいなのだけれど」
冴子ちゃんのまわりだけ、局所的豪雨が……！　これがゲリラ豪雨……？　冴子ちゃん、泣いているの？　背中で泣くなんて、初めて見たよ。何がこの二人の間にあったのかな？　激しい恋かな？
……まあ、あまり、というか、かなり嬉しくなさそうなんだけど。
二人の温度差がすごいよ。
「さあ飛び込んで来るのですわ！　わたくしのナキウサギちゃん！」
「マイハニーみたいに言うな！」
「そんなことは言ってませんわ！　自ら自動変換できるなんて、やはりわたくしとさえぴょんは相思相愛なのですわね！　確信しましたわ！　赤目のチビ子ちゃん！」

「チビはアンタじゃないの！」
「アナタも昔はわたくしよりもおチビちゃんでしたわ」
へぇ、冴子ちゃんって小さかったんだぁ……。
ところで、そそそそそそそうしそうあい？
ってどういう漢字だったっけ？
「まどか、そうしそうあいは、相思相愛と書くぞ。お互いに愛し合っている様子を表す四字熟語だ。いしし」
「愛し合ってるの！？」
「なわけないでしょう！　ただの腐れ縁よ！」
冴子ちゃん……恥ずかしがる冴子ちゃんの気持ち、わかるよ。私もお姉ちゃんのこと好きだもん。
「そんな目で見ないで！」
きらきらきら。
「何を期待しているのよ！」
道音ニーナさんがなにやら感慨深そうに首肯して。
「そうなのですわ。さえぴょんはそれはそれは、昔は雪兎のように小さくてかわいかったのですわ。わたくしがいないと、寂しいだけで、毎晩毎晩大泣きして――」
「嘘を織り交ぜるな！　アタシが背が低かったのは昔だけでしょう！？　今はアンタの方が極小じゃないのよ！　このブラジル水着！」
「ブ……っ！　何て破廉恥な！」
話の腰の骨が軋む音が聞こえるよ。これは持ちこたえて見せなきゃ！
私はすかさず。
「いいの、えっと……、ブラジルさん続けてください」
「ブ……っ！　わたくしは道音新菜ですわ！」
「あ、ごめんなさい。おもわず勢いで。なので、よければエピソードの続きを聞かせて欲しいです」
「まどかちゃんがどっちの味方かわからない！」
ごめんね冴子ちゃん。でも、これはサガなの。

私にそのブラジリアンエピソードをください！
「……ふ、ふふん」露骨に眉間にしわを寄せたブラジルさんもといニーナさんは。
「大泣きするたびにわたくしはさえぴょんを抱き寄せて軋むベッドに優しく押し倒し、微熱を帯びた耳元に『灯りは消しませんわ。顔が見えた方が安心するでしょう？』と囁いていたのですわ」
「ほわわ……っ！」
大人だよ！　大入り袋だよ！
「嘘で塗り固めるんじゃないわよぉ！　んなことあるわけないでしょう！」
「ほわ？　ちがうの？」
「つーか、まどか、何をそんなに大興奮しているんだ？」
「お、お姉ちゃん！？　ななな何でもないよっ！」
「そうか」
……はう。人様のエピソードで我を見失っていました。お姉ちゃんごめんなさい。
するとお姉ちゃんが得意満面の道音ニーナさんをまじまじと眺めて。
「道音新菜、道音新菜……、お前、同じクラスじゃないか」
「へ？」
私、全然クラスメイト覚えていなかったから、わからなかったよ。
「てことは、冴子ちゃんとも、私とも同じクラスなんだね」
……あれ、道音ニーナさんの様子がおかしいよ？
「ド、ドッペルゲンガー……」
「何を失礼なことを言っているのよ。梅園姉妹じゃないのよ。アンタもクラスメイトでしょう？」
「……は、あ、……ふふん。双子なのですわね。わたくしは一日中さえぴょんしか見ていなかったから覚える暇はありませんでしたの」
「キモチワル」
「……あなたたちはここで何をしていましたの？」

「自然の摂理みたいにスルーするのよね、アンタって。アンタの存在が特殊相対性理論みたいなのに。腹立つわ」
うーん。冴子ちゃんはブラ……道音ニーナさんのこと、苦手なのかな？　でも、それ以上に仲よさそうだなぁ。私にはそう見えるよ。
「ランチタイムだ」とお姉ちゃん。「不出来な妹の作った弁当だが、食べていくか？　クラスメイトだしな」
「いや、たまき……ちゃんが言えることじゃない気がするのだけれど」
「お、お腹なんか空いてないのですわ」
そのわりには私のお弁当に興味がありそうな。
気がつけば、帯みたいなもので、背中をばってんにしてる。
真っ白な腕がのぞいて、スタンバイってところかな？
「不束ながら精一杯作ったんだ。おかずもまだあるし、一緒に食べよう？　ブラ……ニーナさんでいいのかな？」
さっき、冴子ちゃんから友達に接する時の注意点を学んだし、実践だよ。
「そう言ってわたくしを引き込んで、校則違反をうやむやにする気ですわね！？」
「お、お腹空いてない？」
「わはははは、バレたか」
「むしろUターンしなさいよ。帰りなさいよ」
三者三様です。けれど、ニーナさんの答えはすぐにわかりました。

――ぐう。

「た、食べてやってもいいですわ！　取り皿をよこしなさい！　そ、その前に喋りすぎて疲れちゃったから、自販機でお茶を買ってきますわ！　あ、その卵焼き！　わたくしが戻ってくる前に食べたら怒りますわよ！　いいですわね！」
そして、パタパタと小さな体を走らせて、廊下へ出て行ってしま

いました。
「むしろそのまま事故りなさいよ。戻ってこなくていいわよ」
「な、何がそんなに冴子ちゃんを拒絶させているの？」
「わからなかったかしら？」
頬がちょっとこけた冴子ちゃんがうっすらと笑みをみせる。
「ウチはなんとなくな」
「そんなたまきちゃんと似てるとか思ったアタシが悪かったのよ」
「え、なんか言ったか？」
「いいえ、何も。……アタシも、あえて新校舎でお茶を買ってくるわ」
「おう、ならウチはリンゴジュースな」
「お姉ちゃんリンゴジュース好きだもんね」
「やっぱり似てるわ……」
友達がまた増えたのかな？　私のこのドキドキは、楽しいってことなんだよね！
お姉ちゃん、高校って遠足以上に楽しくなりそうだね！

幕間　おまけ1

おまけ

春の日差しがぽっかりつくった陽だまりの中。
新校舎のとある外付け自販機前にて。
女子サッカー部やソフトボール部のかけ声が響き渡る。

冴子「げ、なんでアンタがここでお茶買ってるのよ（裏を読みすぎたわね）」
新菜「さっき買ってくるって言いましたわ（ふ、二人きり……）」
冴子「そうだったわね……ねぇ、ニーナ」
新菜「な、なんですの？」
冴子「なんかその、ええと。別にシカトしていたわけじゃないからね」
新菜「さえぴょん……、ふふん。そそそんなのわかってますわ！」
冴子「記憶から消していたのよ」
新菜「……（一番上のお茶のボタンに手が届きませんわ！　着物のせいで腕もあがりませんし。うう！）」
冴子「（ポチッ）ほら、これでしょう？　ニーナって玉露入りのこれ好きよね」
新菜「あ、あり、ありがと……（さえぴょん、また背が伸びたような気がしますわね。胸も……うらやましい）……なんて！　さえぴょんのバーカバーカ！　さえぴょんのチビ！　わたくし先に戻りますわ！」
冴子「え……。あ、危ない……」

しかし着物で走りにくかったのか。
ぼてっと転んだニーナを、冴子はしばらくぼんやり眺めていた。

借り物なのにー！　と、新菜の涙声が聞こえたような気がした。

冴子「あ、リンゴジュースないのね……。たまきちゃんのはぎりりオレンジ味でいいかしらね。ついでにまどかちゃんのも買っていってあげましょうか。……お弁当、美味しかったな……」

昼下がりの空は、いまだつぼみのままの桜の木に、ぬくもりを贈っているように思えた。

ちょっとだけ頬に寒さを感じた冴子は、けれど、お腹はぽかぽかだった。

それはもしかしたら、お腹がいっぱいだからかもしれない。

それはもしかしたら、安心感なのかもしれない。

そそっかしい王子様……か。

冴子が思わず微笑んでしまっていることに気がつくのは、あと数分先の話で、これはまた別のお話。

メガ盛りなお年頃

入学式から一週間。
だいぶ高校にも慣れてきました。
たまにね、放課後、あの旧校舎の家庭科室でお話してるんだ。こっそりお菓子の材料を持ち込んで、この間はクッキーを焼いたよ。お姉ちゃんの頬張る顔がかわいいの！
だから、とっても毎日が楽しいよ。
お姉ちゃんはいつもかわいいし、あとね、冴子ちゃんとニーナさんはたまに仲悪くなるけど、幼馴染みの絆なのかな？　その距離感がちょっとだけうらやましい。
素敵な友達ができて、私はしあわせものです。
でもちょっとだけ困ったことがあるのです。
「――それじゃあ、このときの光源氏の心情はどうだろう。梅園……たまき。わかるか？」
「先生、お姉ちゃんは私の前ですよ？」
今日はこれで三回目。
よくみんなに間違えられるの。
先生にまで。
ううう。
……。

「そんなに似ているかなぁ」
昼休み。お弁当を囲いながらいつもの四人――お姉ちゃん、冴子ちゃん、ニーナさん、私でおしゃべり時間。今日の重箱のイラストはだるまさんです。
「クリソツですわね」
「く、クリソツ？」
ニーナさんの即答に、冴子ちゃんが首をかしげる。

「あら、さえぴょん、業界用語ですわ。知らないのかしらん？」
「ああ……、その業界の伝統はもうバブルの泡とともにはじけて廃れたと思うわ」
　それからさえぴょんと呼ぶのはいい加減辞めて、と冴子ちゃんは卵焼きをぱくり。
「パステルカラーのカーディガンを肩にかけるスタイルとかな！　あれ古典だよなあ」
　お姉ちゃんはアスパラを頬張り、もぐもぐしながら。行儀悪いけど、でもかわいいなぁ。
「そうね、でも噂によるとまだそういうプロデューサーもいるとかいないとか言うわよね」
「見かけたら足あるか確認した方がいいぞ」
「……へっ？」と冴子ちゃん。「キャー」と私。
　お姉ちゃんのジョークは面白いの。お化けなんかいるわけないのに。
　あれ？　冴子ちゃん？　冴子ちゃんの顔が青いよ？　それから右腕が発光……気のせいかな？
「伝統芸能を軽視したらいけませんわ」
　ニーナさんはぴしゃりと言って、牛乳をじゅじゅじゅーっと飲んだ。
　ニーナさんはこの間、琴を弾いてたらしいの。だから着物着てたんだって。
　結局部活は入らなかったみたいなんだけど、そういう日本の伝統が好きなんだって言ってたよ。
「しっかし、ほくろだけじゃなんとかならないのか？　クラス同じにしたのはあっち側なのによ。だからウチは辞めた方がいいって言ったんだ」
　と、お姉ちゃん。え、そ、それって。
「お姉ちゃん私と同じクラスじゃ嫌なの……」
「そんなわけないだろう。まどか、お姉ちゃんは同じクラスになれ

て嬉しいぞ」
ぱくっと箸を咥え、にゅっと手が私に向かって伸びてくる。
もにゅっと。
ああ、お姉ちゃん。そこ気持ちいいよお。
頭を撫でられるの、弱いのー。
「でも、見分けがつかないからって、間違えていいっていうスタンスはよくないよなぁ」
箸を咥えたままお姉ちゃんが頬を膨らませた。
私は、はっとして。
「どうしたらいいのかなぁ？」
「……髪型を変えてみたらいいんじゃないのかしら？」
「あ、冴子ちゃん、さえてる！」
さすが冴子ちゃん。お姉ちゃんと同じくらい物知りなんだよね！
「いつか言われると思ってたわ」
「ほわ？　なんのこと？」
不思議なものを見る目で見られて、私はなんかうずうずしちゃう。
「そうですわね。お二方とも髪型に個性がないのですわ。わたくし、ヘアゴムとかヘアピンとか、持ってきていますからちょっといじらせて貰いますわよ」
「ウチはいいよ。めんどくさい」
机に肘をつき、けだるそうにするお姉ちゃん。かわいい。
「そうだよ。お姉ちゃんに面倒なことはさせたらダメだよ」
「じゃあまどかさんがわたくしの美の手ほどきを受けるというのですわね」
「ニーナっていろんなものじゃらじゃら持っているわよね」
冴子ちゃんの言うとおり、そういえば今もサンザシのヘアピンで前髪を分けているよね。
ツインに括っているヘアゴムも、カラフルだぁ。
「ニーナさんってお洒落だね」
「当たり前ですわ！　レディのたしなみですわ！　さあ観念して跪

いていじられればいいのですわ」
「ニーナ、それはなんか違うわ」

私、どんな髪型になるのかな？
放課後にやってみることになったよ。

メガ盛りなお年頃２

放課後。
旧校舎家庭科室。
「まどかさんって髪の毛さらさらでいいですわね」
「お姉ちゃんの方がもっとさらさらだよーそう思うでしょ？」
ニーナさんがダメージケアのＣＭみたいに髪の毛をさらっさらっといじる。
両手首には色とりどりのヘアゴムが。
「黒っていうのもまた、憧れますわ」
「ニーナさんってブロンドだもんね。かわいいのに」
「そ、そうかしら」
私はニーナさんの髪の毛がうらやましいけど。
「隣の芝生は青いってこのことね」
「冴子ちゃんのスタイルもうらやましいよぉ」
「え、そ、そんなふうに見つめないで」
恥ずかしがる冴子ちゃんかわいい。肩をきゅっとよせてもじもじしちゃうなんて。
意外と……恥ずかしがりさん？
「そうですわね。うらやましいと言うよりもわたくしはもうすでにうらめしいですわ」
「アンタはアタシを逆に、うやまえ」
あん。冴子ちゃんがいつも通りきりりっとしちゃった。
「ところでたまきさん、どうしてまどかさんの声真似をしているのかしら？」
「？　？　私はまどかだよ？」
「え？　ど、どういうことですの」
私の目の前に対峙するように立っているニーナさんは、ニーナさんの手前にある椅子に腰掛けたお姉ちゃんの髪の毛から手を離し、

私とお姉ちゃんを見比べる。
ニーナさんが今まで髪の毛をいじっていたのは、お姉ちゃんのだよ？

「ニーナ、お約束ごくろう」
「わ、わ、わかってやっていたことですわ！」
「わはははははははっ」
お姉ちゃん大爆笑。私の隣で冴子ちゃんもくすくす笑っている。
お姉ちゃんがやりたかったことってこれだったんだね。
ニーナさん、顔真っ赤っか。
「小さいからって馬鹿にするんじゃないですわーっ！」

メガ盛りなお年頃3

私の髪の毛は今、ワックスでモヒカンみたいにビビン！　とスカイタワーみたいになってる。
これはこれで、お姉ちゃんが似合いそうだなぁ。
ニーナさんが櫛で髪の毛を元通りにしながら。
「さえぴょんよりも癖がない直毛だからふんわりしないのですわ」
「へえ、冴子にもやってあげてたことがある言い方だな」
床に轢いたブランケットの上でごろごろしながら、コミックを読んでいたお姉ちゃんが上半身だけ起こした。
「そうですわ。さえぴょんは昔――」
「昔の話はやめろ！」
ビシィっと冴子ちゃんの右腕がニーナさんの口もとに炸裂する！
冴子ちゃんの後ろにはエメラルド色の残像が残った。
「もう、我慢の限界よぉ！」
「もがもがっ！　もがもがもがっ！」
「さ、冴子ちゃん？」
「あ、ええとね、まどかちゃん、そそ、そうなのよ。昔ちょっとだけ遊びでやっただけよ」
いつになく歯切れの悪い冴子ちゃん。
「もがもがっ！　ぷはっ！」
ニーナさんは縄を抜けた人質のようにめいっぱい息を吸うと。
「自分で髪の毛も結べなかったからわたくしが一からすべて教えてあげたのですわ！　昔はわたくしよりも背が低くて内気でそれはそれはとてもかわいらしくて――」
「やめろー！　うわあーーー！」
耳をふさぎわーわー言う冴子ちゃん。ど、どうしたの？
「さえぴょんはふわふわの髪の毛と同様！　自分を盛っているのですわ！」

「うわーーーーん！　だからニーナと一緒にいたくないのよぉ！」
冴子ちゃんは目にもとまらぬ早さで扉まで移動すると、ガラガラ！　と扉を開け、ピシ！　と閉め、家庭科室を飛び出してしまった。
「ま、まだ話は続きですのに！　ちょっと！　さえぴょん！？」
続けてニーナさんも外へ飛び出してしまった。
ぽつりと私とお姉ちゃんが残されて……。
えへへ、二人きり。
じゃなくって！　ばかばか私。
「お姉ちゃん！　た、大変だよ！」
がばっと立ち上がったお姉ちゃんは、うんうんと背伸びして。
「あの二人にも色々あったようだな」
「ど、どうしよう。せっかく仲良くなれたのに……」
「ニーナに悪気があるようには思えないしなぁ」
「そうだね、仲が悪いだなんて思えないよ！」
私あの二人のこと、何も知らないけど、でも、こんなの悲しいよ。
もっともっと知る前に、二人ともいなくなっちゃうなんて、いやだよ。
するとお姉ちゃんが私のところまできて、頭をぽんぽんした。
「お姉ちゃんパワーだ」
「え？」
「手分けして探してみよう。まどかの高校でできた初めての友達が、困ってるんだ」
「でも、どこにいるかわからないよ？」
あやめ高は、とても広いんだよ？　お姉ちゃん。
「大丈夫、お姉ちゃんはなんでも知っているぞ」

メガ盛りなお年頃４

「はぁ……っ！　はぁ……っ！」

私はお姉ちゃんに言われたところまでやってきた。

本堂横の自販機置き場。

ここは本堂の窓からも、旧校舎やその他の施設から死角になるところなんだ。

お姉ちゃんがそう言ってた。

お姉ちゃんは知っていたみたい。

知っていた。というと昔から知っているかのようだけど、そうじゃないんだって。

気がついちゃったと悪戯っぽい笑顔で言われて、私は察した。

冴子ちゃんは昔の自分から脱却したくて、ここにこうしている。

昔何があったのかはやっぱり本人じゃないし幼馴染みじゃないからわからないけれど。

ニーナさんの言い方を鑑みるに、昔の冴子ちゃんは背が低くて内気……。

今の雰囲気とはまるで真逆だよ。

その過去の自分が嫌だったんじゃないかって、お姉ちゃんは言う。

だから、過去を知っている幼馴染みのニーナさんが鬱陶しかった。

確かに。

過去を変えたければ、過去をなかったことにして、知らない土地で知らない人たちと一から関係性を築き上げていけばいい。自分で思い描いた自分を演じて、自分自身を作り直せばいい。

そうだったよね、お姉ちゃん。

でもね、それを聞いた上で、私は冴子ちゃんに出会えてよかったって思ったんだよ。

「たまに、ここに来てたんだってね。お姉ちゃんが教えてくれたよ」

私は自販機の隙間でうずくまる冴子ちゃんの前に立った。

「作り直すことなんか、できないよ」
顔をあげた冴子ちゃんの頬には、うっすらと涙の跡かな……、悲しいサインがあった。
「過去を否定したら、冴子ちゃんは消えちゃう」
小さな頃からずっと歩いてきた道を封鎖しちゃったら、それは自分自身を否定しちゃうことになるんだ。そしたら、今の自分は消えてしまう。なかったことになってしまう。見えなくなって、誰からも相手にされなくなってしまう。
じゃあどうすればいいの。
私、自分の言葉で何を伝えればいいかわからないよ、お姉ちゃん。
お姉ちゃんみたいに、上手に喋ることなんか、できないよ。
強い心を持って！　かな？
泣かないで！　かな？
わからないよ、お姉ちゃん。で、でも――
「冴子ちゃんと友達になれて嬉しかったよ。これで友達じゃなくなるなんて悲しいよ。四人でいられなくなるなんて悲しいよ」
……うう。目の奥が痛いよ。
「冴子ちゃんのこと……、過去に何があったかはわからないけど、でも、毎日少しずつ冴子ちゃんのことを知ることができて、私とても嬉しかった。今も胸の奥がズキズキするけど、でも、嬉しかった」
だから、一緒に悲しめるんだ。
悲しいから、嬉しいんだ。
冴子ちゃんの抱える悩みがわからなくても、でも、気持ちはこんなふうに繋がることができる。
もう、友達だから。
でもね。
気持ちだけ前に行ってしまって。
なのに冴子ちゃんのことを知らない自分いる。
それがとても、悔しいよ。
「だから、悩みがあるなら教えて？　私にできることなら、……お

弁当がんばって作るよ？　お姉ちゃんの分と、あと二人の分！　みんな美味しそうにご飯を食べる姿がみたいよぅ」
こんなに、こんなに悲しいなんて。
ぬぐっても、ぬぐっても、冴子ちゃんの顔が滲んでしまう。
「なあに、その頭……ふふっ」
「ほわ……？」
冴子ちゃんが笑ってる？
「ワックスのせいでハリネズミみたいになっているわね。ふふ、傑作じゃないの。盛りヘアーね」
「え、え？」
私は顔に血が上ってくることがわかった。
頭に手をやる。
ちくちくする。
髪の毛がもっしゃもっしゃ。つんつん。
う、うわあああああなにこれ、こんな頭で校内を走ってたの？　はずかしいはずかしいはずかしいはずかしい！　もう、お姉ちゃんのお嫁になれないよ！　どうしよう……うう。
「そんなわかりやすい頭してたら、まどかちゃんが来たって、すぐにわかっちゃったじゃないの。もちろん、アタシはそのほくろがなくたって、まどかちゃんを見分けることができるけどね」
「でもね、これはその気がつかなっただけで、ええっとね、わーん」
「アタシだって友達だから」
「へ？」
友達だから。
そう冴子ちゃんははにかんでくれた。
幼さの残る笑顔で。
これが等身大なのかな？　きっとそうかな。
「まどかちゃん、何そんなに深刻な顔をしているの？　アタシはね、喉が渇いただけよ。久しぶりに炭酸を飲んだら、目にしみただけ」
で、でも……。

「お見通しなのね。うまくいくと思ったのに……」
冴子ちゃんは立ち上がって、お尻を叩いた。
その仕草はやっぱり、大人っぽい。
「アタシは弱い自分を変えるためにわざわざ隣町のこの高校に来たの。ちょっと余計な荷物までついてきちゃったけれど。でも、それもひっくるめてアタシなのよね。過去を否定するためにここにいるんじゃないわ。だから安心して？　……これで隠し事はもうないわ」
「また、四人で一緒にお弁当食べられる？」
「当たり前じゃないのよ」
そう言うと、冴子ちゃんは一歩私に距離を詰めて。
「期待はずれでごめんね。でも、こんな子でもよかったら、また友達になってほしいわ」
「……さえぴょん」
差し出された手を私は握りかえした。
私の友達の手。意外と小さくて細い手。
まるでお姫様みたい。
私は目元をぬぐいながら、そう思った。
「その言い方はダメよ」
「えへへ、ごめんね」
「ふふふ」

――そそっかしい王子様にだけ、許してあげるんだから。

メガ盛りなお年頃５

……さて。
語り部が変わるぞ。
ウチだ。スネークだ。
否、たまきだ。
あの子だけに任せていたら、ゆるゆるなままだしな。
たまにはおねえちゃんパワーを使おう。
とはいえ。
ウチは鶴来冴子があそこでぼうっとしているところをみてしまっただけなんだ。
あとはちょちょいと推理をして、道音新菜と鶴来冴子の様子を察して、関係性を導き出しただけだ。
けれど、ウチがこいつらの輪の中に入っていったら、まどかのように取り持つことなんかできなかっただろう。
まどかだからできたんだ。
冴子が友達として自ら選んだまどかだからできたんだ。
まどかはさ、おっちょこちょいで世間知らずでマヌケでノロマだけれど、ウチの自慢の妹だ。
とても、思いやりのある子なんだ。
そこがウチとの違いさ。
「わたくしはさえぴょんが無理をしているのを知っているのですわ」
本当、ニーナって小さいな。１３０くらいか？
「１５０ですわ」
「そんなにあるか？」
「あるに決まっていますわ」
「そうか。ああ、まあ、見ていてわかったよ。冴子が無理をしていることくらいさ」
ニーナも大概、大切な人の前で意地っ張りになるきらいがあるけ

れどな。
　コイツも、根っこがとてもお人好しなんだよな。
　一週間でそれがわかるなんて、冴子も含めて、おまえら素直すぎるだろ。
　しっかしニーナを探すのに苦労したぞ。
　……迷子になるなよ。学校で。
「さえぴょんはとても弱い子なのですわ」
「そうは見えないぞ」
「それはわたくしがそばにいるからですわ！　同じ高校を受けてよかったのですわ！」
「……なるほどねぇ」
「だからわたくしがそばにいてあげないと、あの子はひとりぼっちなのですわ。」
「おいおい、ひとりぼっちかよ？」
　自販機の前へ親指を向ける。
　まどかと冴子。お互い泣きはらした目をしているくせに、どこか晴れ晴れしたような顔をしているね。あれが、ひとりぼっちに見えるか？　ニーナ。
「あ……さえぴょん」
「過去に何があったのかは知らないよ。ウチには価値のないものだ。けれど、おまえらの思い出は大切なものなんだろう。だからその思い出がいつまでも壊れないように、大切にしたくなる気持ちもわかるさ。でも、ウチらは成長する。成長しようとする。今日の自分よりも明日の自分を認めて欲しくて、ウチらは生きている」
「……さ、さえぴょん」
「今のアイツを見つめてやれよ。……好きなんだろ？」
　少し乱暴な言い方だったかもしれないが、ウチはまどかのように優しさを振る舞えるほど器量がない。ウチが生まれてくる時、そういうものを一切合切お腹の中に忘れたのかもしれないね。まどかが全部持っているから、ま、いいけれど。

「すすす好きなわけないじゃないの！　ですわ！」
「口調が変だぞ。じゃあなんなんだよ？」
「……このままじゃさえぴょんとまどかさんがひっついてしまう……それは……最優先で回避すべき」
「お、おい！」
手を振りながら二人の方へ走っていくニーナをウチは追いかけない。
距離が、近すぎたんだよ。
ニーナと冴子だけじゃあ、破綻してた。
お節介かもしれないなぁ。
ま、ウチはお姉ちゃんなんだ。あまりでしゃばらないとしよう。
三人とも、素直でいい子だ。ちょっと単純な気もするけれど、そこがいいのかもな。
ウチもうずうずして、結局駆け足になっていた。
しかし、……まどかの髪の毛……何があったんだ？

梅園家を覗いてみよう。夕食編。

ここはあやめの市。北国随一の歓楽街がある大きな都市だ。
その中心部からちょっとだけ西に行ったところにある山肌を削って計画的につくられた閑静な住宅街に、その双子姉妹の一戸建てがある。
春の夜の夢。あっというまに、夜になった。
学校で通常業務をこなし、今日は新たにできた友人、鶴来冴子と道音新菜とちょっぴり距離が縮まるエピソードをこなし、姉妹はお疲れかもしれない。
けれども春の夜はすぐに明ける。
永遠にも感じられたであろう友情をかみしめた姉妹は、どんな顔をして明日を迎えようというのだろう。
ちょっとだけ、ズームアップしてみよう。
どうやら二人とも、一階にいるようだ。
「お姉ちゃん、今日はあんかけ焼きそばだよ～」
部屋着にエプロン姿という、至極家庭的な出で立ちのほうが妹のまどか。
今は料理中のためだろうか、髪の毛を後ろで一括りにしている。
その横顔は、将来良い奥さんを約束された母性がある。
約束された母性。約束の大地。試される大地。
なんとなく端から見た彼女の雰囲気は、広大な土地に舞い降りた銀翼の女神である。
もしかしたら夢の世界の住人かもしれない。
梅園家の家事は、妹のまどかがすべてこなしている。
両親は海外によく行くため、あまり家にはいないからだ。
出張の多い父に代わって「苦労をかけて済まん」と言いたい。
おや、テレビの前で何かがもぞもぞっと動いた。
「ほぉ～、良い匂いがするな。麺はどこのだ？」

姉だ。お姉ちゃんだ。まどかの大好きなお姉ちゃんがそこにはいた。
ワイシャツにスカートという、制服を着崩したスタイルでソファでごろごろしながらテレビを見ているのが、姉のたまきだ。
ワイシャツはかろうじてボタン二つで前が留められていて。
ああ、お腹をボリボリと。
ちょっとはしたないぞ。
まぁ、女子校に通うリアル女子高生なんて、こんなものだけれど。
巨乳を見ると、叩きたくなるんだよね。
それはこっちの世界の話だ。失礼した。
姉のたまきは妹と違って、あまり母性は感じられない。どちらかというと、男っぽい。
言うなれば、女戦士、女盗賊、転職してレンジャー。……からの勇者？
なぜか姉のたまきからは、勇者的な万能パワーを感じる。
お姉ちゃんパワーとでも言いたげなパワーだ。
「猪熊製麺さんのだよぉ」
「猪熊かぁ。あそこの太麺は味噌スープと合うんだよなぁ。転じて餡とも絡みやすくていいんだがなぁ。焼き目をつけても良いんだよなぁ」
「でしょでしょ？　お姉ちゃん、麺にうるさいもんね」
「ああ、麺はラーメンの神髄だからな」
「さっすがお姉ちゃん。物知り～♪　ラーメンもうちょっとでできるからね」
「おう。テレビ見て待ってるわ」
……今日はラーメンなのだろうか。
あんかけ焼きそばの麺の話をするはずだったのに、いつのまにかラーメンの話になっていた。
「ラーメン、ラーメン、ラーメン～♪　あんかけラーメン～♪」
お、コラボした。

まぁ、美味しそうだな。あんかけラーメン。
いやいや。違う違う。見落としそうになった。
あまりにも当たり前の流れの中にツッコミポイントを入れ込まれたものだから、気がつかなかった。
「わはははははっ！　なんだこの海パン刑事！　おい、まどか！　すげえおもしれー」
黒光りした海パンを頭に被って、裸ネクタイで「ナンデモカンケイアル！　ナンデモカンケイアル！　ハイ！　相関図！」というネタを披露する芸人が薄型テレビの中で踊っている。斬新である。ちなみに彼の下半身の描写はできそうにない。ご容赦願いたい。
姉のたまきがじたばたしながら笑い転げている。
「相関図って！　相関図って！」
「なになに？　お笑い番組？」
まどかがにょきっと顔を出す。さすがに料理中でも気になるよね。
「いや違う。池上先生のあれだ」
「あー、お勉強の番組だね！　私そういうの難しくて見ると眠くなっちゃうよ」
まさかの番組内容だ。
笑えて学べるなら寝れそうもないが。
「まぁ、いいから、まどかも一緒に見よう」
「ごめんね、お姉ちゃん、今麺を茹でてるから、茹で加減アルデンテだから」
それはパスタだ！　まどか！　もしくは針金という九州男児が食す男の麺だ！
……違う。落ち着け。そこじゃない。突っ込むべきはそこじゃあない。
「なんだよもー。料理なんかしているからだぞ」
そこだぁ！
たまきはどうしてそんなに何もしないのだ！
「えへへ、ごめんね。もうちょっとだから」

まどかはなんで嬉しそうなんだ！
「お姉ちゃんのゴハン！　お姉ちゃんのゴハン♪　愛のゴハン～♪」
わけがわからないよ。
それでもこの姉妹はうまくまわっている。
今日も、妹特性の美味しいご飯ができあがった。
まぁ、あんかけラーメンなんだけどね。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n8627z/

梅園さん家のたまきとまどか

2011年12月31日23時46分発行